



市内諸沢には、美人の湯とも称される「やまがたすこやかランド三太の湯」があります。市内はもちろんのこと市外からも多くの方が訪れる人気観光スポットです。

この温泉は三太という巨人の伝説が名前の由来となっています。

【諸沢にあらわれた巨人】

いつのころか分からないほどの昔々、三太という巨人が、ある日突然諸沢村（現在の諸沢）にあらわれ、住みついたそうです。その大きさは諸沢村に八百八ある沢をひとまたぎにし、崖の上に座りながら諸沢川の水を一気に飲み干すほどだったと言われています。

また、三太のイビキで山が2つに割れ（諸沢地割）、山が割れた音に三太が驚いて、手をつきながら立ち上がった跡に水が溜まり、右の足跡が亀ヶ淵（諸沢上山）、左の足跡が大釜の淵（諸沢沢又）、右手の跡が鰐ヶ淵（太子町頃藤）、左手の跡がさがり淵（山方新道）になったそうです。

【一晩で開墾して消えた三太】

最初はその大きさから、村人は三太を恐れていましたが、三太が心優しいことが分かるにつれ、会話するようになりました。

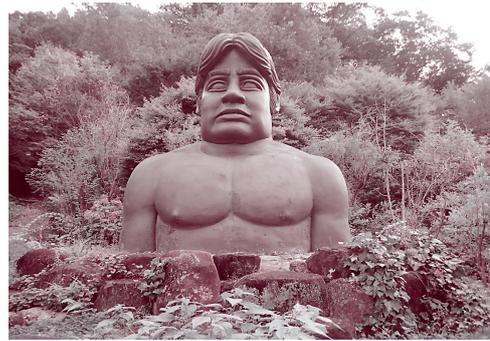
三太が住みついたころ、諸沢村では沢又を開墾しており、来る日も来る日も泥だらけになって仕事をしていました。その姿を見た三太は、村人の頼みを聞き、開墾を手伝う代わりに、食事としてコワメシ（赤飯）30人分と味噌汁と漬物を一斗樽に1杯ずつにお酒を3樽用意して高膳に添えることと、そうすれば3日以内に開墾を手伝うと約束しました。

三太は村人から出された食事をたちまちに平らげるとなぜかグウグウと寝てしまい、1日たっても2日たっても開墾する様子がありません。村人も半信半疑になりながら3日目を待ちます。そして約束の3日間を過ぎた翌朝、沢又はあたり一面きれいに開墾されていました。

村人は驚きつつも、お礼を言おうと三太を探しますがどこにも見つかりません。置手紙を残して、三太はふるさとに帰っていった後でした。この巨人はいつの間にか開墾した土地の名を付けて「沢又三太」と呼ばれるようになりました。

【茨城県内の巨人伝説】

茨城県は巨人伝説の宝庫です。巨人はダイダラボウ、



三太の湯入口にある三太像

もしくはダイダラボッチと呼ばれ、県内には30例ほどの巨人伝説があります。特に有名な水戸市塩崎町の大串貝塚は『常陸国風土記』（和銅6年（721）編纂）に巨人が貝を食べて積った貝殻が丘（貝塚）になってできたと記され、古くから巨人伝説が茨城県内に根付いていたことが分かります。巨人は身の丈の大きさや力強さが常人より抜きん出ており、県下の河川や窪地、山岳の由来に残っています。諸沢の開墾を手伝った三太の伝説もその中の一つといえるでしょう。

ところで、弁慶は歴史上の人物ですが、彼が富士山と筑波山の重さ比べをしようと山を藤ヅルで縛り、天秤棒で担いだ際に筑波山の藤ヅルが切れて落ちたので、筑波山の山頂が2つに割れたという伝承があります。茨城県には巨人伝説に類似した弁慶の話が、つくば市や鉾田市などに残っています。

本市内では、大宮地域の泉地区には、ダイダラボッチが常陸太田市の真弓山から大宮地域をひとまたぎにした足跡から泉が湧き出し、それが現在の泉観音の泉の由来であるとも言われています。弁慶のような話だと、室町時代、佐竹氏の家来だった力自慢の小林大炊介が、ケンカの際に勢いあまって投げた杉が逆さのまま根付いた「逆さ杉」の話も残っています。

いまま地名の由来や逸話の中に、三太のような巨人があちらこちらでひっそり隠れているかもしれません。

<参考文献>

《三太伝説》

・堀江文男『改訂版 語り継ぎたい奥久慈の秘話』（平成8年（改訂版平成12年））

《その他巨人伝説等》

- ・大宮町教育委員会『大宮町の民話』（平成4年）
- ・藤田稔『日本の民俗 茨城』（昭和48年）
- ・藤田稔『茨城の民俗文化』（平成14年）

■問い合わせ■

文化スポーツ課 文化・スポーツグループ

☎ 52-11111（内線 344）